



Title	ゾラ『パリ』における物語構造の変化：円環から直線へ
Author(s)	安達, 孝信
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2018, 52, p. 77-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゾラ『パリ』における物語構造の変化

——円環から直線へ——

安達 孝信

キーワード：自然主義／パリ／物語論／郊外／科学技術

はじめに

同時代パリを舞台に、無政府主義者による相次ぐ爆弾テロと、信仰を失った司祭の科学と労働による救済を描いたゾラの小説『パリ』（1898）は、同年から始まる作家のドレフュス事件への関わりによって、極度に政治色を帯びて読まれてきた作品である。この小説そしてゾラ自身への賛否が、ドレフュス事件に対する立場を表明するものとして受け取られてしまったことで、その文学的側面は長きに渡って等閑視されてきた。

しかしこの小説は『三都市叢書』（1894-1898）の末尾を飾るのみならず、次の『四福音書』（1899-1903）への導入としても機能しており、第二帝政下におけるブルジョワ社会の偽善と社会の歪みを暴き出していた攻撃的な作家の、楽天的なユートピア作家への転身という謎に取り組むためには避けて通ることができない作品である。本稿が目指すことは、ゾラの作風の大幅な変化を、作家の思想的変遷ではなく、物語を束ねる構造の変化を分析することによって説明することである。

1. 物語の円環構造とその放棄

1-1. 『ルーゴン＝マッカール叢書』における基本的なサイクル構造

本論に入る前に、比較対象となるそれまでのゾラの作品の物語構造について

て簡単に触れる必要がある。『ルーゴン＝マッカール叢書』(1871-1893)には、ある閉鎖的な社会によそ者として主人公が入り込み、その場の特殊性を外部の目から観察し、周囲との間に軋轢が生じ、最後にはその地区から追放されるという基本的な物語の枠組みが見られる。これをアンリ・ミットランは「空間構造に対する作家の三重の関心¹⁾」によって説明する。第一の関心は「主体のハビトゥス、とりわけ根こぎにされた居心地の悪い、不安定で、不適応な状態」に向けられる。第二に、「社会空間、とりわけ都市空間の区分けに対する注意深い直感」がある。そして最後が、「乱雑への、あるいは確立した秩序の突然の否定、否認」への関心である。

とりわけ物語の冒頭と末尾を比較すると、未知の環境への主人公の侵入、そこからの追放というシンメトリーが強調されていることがわかる。オーギュスト・ドゥザレーのいうように、「テキストの冒頭と末尾が対立すると同時に重ね合わさ²⁾」ることで、そこで輪の両端が留められ、物語のサイクルは形成されるのだ。ドゥザレーは『ルーゴン＝マッカール叢書』を「発展」と「繰り返し」という二つの指向性の対立から読み解き、実際には繰り返しそのものの効果によって物語が螺旋状に拡大していることを示した³⁾。

この一連のサイクルを、19世紀に発達した熱力学のサイクルを用いて説明したのが哲学者、科学史家であるミシェル・セールである。秩序、混合作用、無秩序、そして秩序の回復を、彼はレシプロエンジン（ピストン機関）の一サイクルに例える。燃料と差異を持った閉じた初期状態が、同質化の法則によってかき混ぜられる。爆発的燃焼と同時に差異を無くした状態が物語の最高潮に当てはまる。その後、ピストンが惰性で再び初期状態へと戻るように、一見したところ始めとよく似た状態が物語の終わりに再び訪れる⁴⁾。

セールの図式で重要なのは、彼がこのサイクルの両端にわずかなズレを残したことである。冒頭と末尾が完全に同一であれば、回路が閉じられ、全く同じ物語が永久に繰り返されてしまう。よそ者を排除しただけではそれまでに生じた混乱の余波が収まることはなく、水面下では触発された不満、社会のひずみが次の暴発の機会を伺っている。炭鉱を立ち去るエチエンヌは、よ

り大きなサイクルの中で、帝政打倒に向けてすでに動き出している⁵⁾。このようにして、わずかに欠けた小さなサイクル構造の集合からなる、巨大なサイクルこそが『ルーゴン＝マッカール叢書』を形作っている。

1-2. 『パリ』における冒頭と末尾のパリ眺望

本稿で検討することは、『パリ』においてこのサイクルがいかにして放棄されたのかという問題である。『ルーゴン＝マッカール叢書』全20巻は、1851年12月のルイ＝ナポレオンによるクーデタに始まり、1870年の普仏戦争敗戦、そして1871年のパリ・コミュンで幕を下ろすという一つの大きなサイクルを持っていた。その後、『三都市叢書』として『ルルド』、『ローマ』、『パリ』に取り掛かった作家は、ある隘路に陥ったことだろう。これまでの彼の作品は、第二帝政という巨悪打倒の大義名分のもとに、破壊衝動に一定の方向づけがなされていた。しかし既に第三共和制が軌道に乗っていた1890年代において、同じ手法を同時代社会に対して用いることは出来ない。ゾラは『三都市叢書』のために、新たなサイクルを見出すか、従来のサイクルとは別の物語の枠組みを構築せねばならなかった。

一見したところ、『パリ』の冒頭と末尾は、これまでのサイクル構造を継承しているようにも思われる。一月のある朝に、モンマルトルの丘のサクレ・クール寺院の前から、主人公である神父ピエールがパリを見下ろす場面から物語は始まる。

二ヶ月に及ぶひどい寒さ、雪と氷の後で、気が滅入り震えている雪解け水に濡れたパリがそこにあった。鉛色をした広大な空からは濃い霧の喪が降りていた⁶⁾。

『ルルド』、『ローマ』前二作における信仰回復の試みは挫折し、ピエールは信仰を完全に失いながらも、司祭職を続けている。そのジレンマが陰鬱なパリの風景に投影されている。

政治と感情、二つの物語が重なるこの小説において、ピエールの感情的発展を要約すると次のようになる。正式に結婚をせずに女性と所帯を持った兄ギヨームとの交際をピエールは避けていたが、爆弾テロに巻き込まれ負傷した兄を看病する中で、兄弟の絆が蘇る。兄を自宅へと送った際に、彼とその亡き内縁の妻との間の三人の息子たちが科学と労働に従事し健やかな生を送っている様子を衝撃を受ける。兄の許嫁である少女マリーの一言によって僧服を脱ぐことを決心したピエールは、次第にマリーに恋心を抱くようになる。ギヨームは結婚間近だったマリーをピエールに譲り、ピエールはマリーと幸せな家庭を築く。

このような紆余曲折を経て、『パリ』の末尾では夕焼けに輝くパリが秋の刈り入れの比喩で語られる。マリーはピエールとの間の子供であるジャンを、パリに差し出すように両腕で持ち上げる。

その時、マリーは、熱狂的な美しい仕草で、両腕の先に息子を高く持ち上げ、巨大なパリに彼を差し出し、厳かに捧げた。

「ほら！ジャン、ほら！坊やがこれを全て刈り入れて、収穫物を納屋に収めることになるのよ！」

神々しい太陽の光の種を撒かれたパリは燃え上がり、真実と正義の未来の収穫物を栄光の中に包んでいた。(Paris, 636)

『パリ』の後にゾラが取り掛かる『四福音書叢書』、『豊穡』（1899）、『労働』（1901）、『真実』（1903）、『正義』（未完）では、このピエールの子孫たちが主人公となる。この末尾の一文は『三都市叢書』から『四福音書』への橋渡しの機能を果たしている。

冒頭では孤独に、自分の性質とは相入れない宗教の世界に生きていたピエールは、末尾では家族に囲まれて、彼が住むパリという大都市を受け入れている。環境に合わない主人公の居心地の悪さという従来の導入を引き継ぎながらも、末尾では主人公は共同体から放逐されるのではなく、むしろ彼が

パリ全体を主人然として包み込んでいる。初期状態と最終状態の見かけ上の類似こそがセールのサイクル図式の特徴である以上、『パリ』に円環上の構造を当てはめることは難しい。

1-3. 不完全燃焼に終わる一度目の爆発

それでは『パリ』において、いかなる構造がこれまでのサイクル図式に取って代わっているであろうか。本稿は、サイクル構造を生み出す要素、ドゥザレーのいう「繰り返し」、セールのいう「爆発」、が『パリ』においてどのように処理されているのかという問題に注目する。

中村翠は、『ルーゴン＝マッカール叢書』の中においては、後に起こる不幸な出来事が、あらかじめ周縁的人物によって予告されることによって読み手の好奇心を喚起していると指摘した上で、『三都市叢書』において予告が実現されないという大きな転換を迎えたことを示した⁷⁾。予告が実現されることで、物語内部に複数の小さなサイクル状のリズムが生まれる。ところが、『パリ』においてはその予告が実現せず、サイクルは断ち切られる。

『パリ』における予告とは、大規模な爆弾テロによる大都市の破滅である。雪解けのパリを前に気が沈んでいたピエールはモンマルトルの丘の裏手にある貧民窟へ施しに出かけ、そこでラヴーヴという老人が危篤状態にあることを知る。彼を施設に入所させるためにパリ中の有力者と面会する一日からこの小説は始まる。

ピエールは慈善事業に関わるブルジョワや貴族たちにたらい回しにされ、ようやく一筋の希望が見えて来たところで、当の老人が死んだことを告げられ、宗教的慈善の無力さに苛まれる。意気消沈し、通りを彷徨う彼の前に、労働者風の不審な男と口論する兄ギヨームが姿を現す。その直後、銀行家デュヴィヤール男爵宅の前で爆発が起り、ピエールは事件現場から負傷したギヨームを救出する。

怪しげな荷物を抱えたこの労働者サルヴァを、ピエールは一日中行く先々で見かけていた。ピエールはわき腹の膨らみを「パンのかけらが隠されてい

るのだろう (Paris, 109)」と考えるのだが、幾度となく繰り返される偶然の出会いには読者にとっては明白な「爆発の予告」として機能している。

しかし、この爆発は皮肉な結果に終わる。館に出入りする帽子屋の少女1人だけが犠牲となり狙われた銀行家は難を逃れたのだ。それゆえにこの爆発は、労働者階級の悲惨に目をつぶるブルジョワ、貴族階級の偽善をそれまで見せつけられていたピエールと読者にとっては不完全燃焼に終わり、次なる本物の爆発への予告として機能することになる。

1-4. 直前で回避される二度目の爆発

爆弾テロの現場で負傷している兄ギヨームを救出したピエールは、すぐさま兄を家まで送ろうとする。しかしギヨームはモンマルトルにある彼の自宅ではなく、兄弟が幼少期を過ごし、今はピエールが住んでいる城壁外のヌイイの家へと連れて行くように頼む。サルヴァの用いた強力な爆薬は、化学者であるギヨームの工房から盗まれたものであることがすぐに明らかになる。捜査の手がギヨームにまで及ぶことを恐れ、ピエールは兄を自宅に匿い続けるが、そこには徐々に社会主義者や無政府主義者が集まり活発な議論がピエールの前で交わされるようになる。科学と宗教という、相容れぬ道へと別れていたために疎遠になっていた兄弟は和解し、ピエールは脱宗教への道を進む。

負傷から回復したギヨームを、モンマルトルの丘にある兄の自宅兼工房へと送ったピエールは、そこで科学に精通し労働に勤しむ彼の3人の息子たちと、兄の許嫁マリーに出会う。この健康で澁刺とした女性の存在が、ピエールに僧服を脱ぎさることを決意させる。若い2人の間に恋心が芽生えていることを悟ったギヨームは自ら身を引く。

幸福へと突き進むピエールの陰で、ギヨームは厭世主義に取り憑かれ、無政府主義の誘惑に負けてしまう。彼は当初、強力な爆薬を製作し国家に寄贈することで、フランスに栄光を取り戻させることを夢見ていた。しかし、サルヴァをギロチンで冷酷に処刑する国家に失望した彼は、数万人を一度に殺

すほどの大爆発を起こし、一国家ではなく全世界にその爆薬の存在を知らしめることで、戦争そのものを根絶するという夢に取り憑かれる。

しかしマリーを弟ピエールに譲渡することでギヨームが感情面の危機を乗り越えたように、政治的危機を解決したのもまた兄弟愛であった。サクレ・クール寺院の地下に運び込まれた大量の爆薬の前で、導火線を握ったギヨームはピエールに制止される。ギヨームの失恋はサクレ・クール寺院爆破計画を生み出すが、同時にマリー譲渡によって強化されていた兄弟愛によってテロは直前で阻止されたのだ。⁸⁾

2. 『パリ』における発動機のサイクルと醸造桶の比喻

2-1. 放棄された爆発と具現化する発動機

「繰り返し」と「予告」によって生じるゾラの作品に特有のリズムは、『パリ』においても健在である反面、その予告は実現されず、初期状態とは遠いユートピア的な結末へと到達した。本稿はその原因を、ゾラの説明にではなく、サイクル図式に代わり採用された新たな構造によって要請されたもののうちに求める。

ミシェル・セールは『ルーゴン＝マッカール叢書』を発動機の一回転のサイクルから説明したが、叢書において登場する本物の「機械」は正常に作動する状態ではなく、不具合、あるいは大爆発の場面が描かれることが多い。最も熱力学的説明が相応しい『獣人』（1890）の場合であっても、蒸気機関の運動が詳述されることはなく、雪の中での立ち往生、踏切での大事故、そして運転手と火夫を失った機関車の暴走の場面に重きが置かれている。⁹⁾

しかしそれはサイクル図式を物語全体の構造として理解する時、むしろ当然のことである。セールのいう初期状態、混合と発火、爆発、揺り戻し、初期状態に似た最終状態からなる一サイクルを物語に当てはめた際に、各ページで描かれるのは機関の回転運動全体ではなく、燃料注入、混合、爆発といった各段階に相当する作用であるからだ。つまり物語内において爆発は描かれ

つつも、物語全体を統括するモーターの存在は隠されているのだ。¹⁰⁾

物語の発動機を動かす爆発はしかしながら『パリ』においては二度失敗した。爆弾というこれまでにない具体的な形を取りながらも、そのいずれもが不完全燃焼に終わったことは、『パリ』においてゾラが発動機のもう一つ上の段階の運動を物語中に持ち込んだことと深いつながりがあるといえよう。

『パリ』においてゾラは、発動機の諸段階としての爆発ではなく、発動機そのものを物語内で具現化している。テロ放棄によって存在価値を失った新型爆薬は、自動車用エンジンの燃料として平和利用される。発動機のサイクル構造は、物語構造としては放棄されると同時に、自動車用エンジンとして物語内で造形される。振り返ると、迷路のような円環構造をとる『ルーゴン＝マッカール叢書』における数少ない直線運動の一つは、逆説的なことに蒸気機関によって走る汽車の運行であった。¹¹⁾繰り返される爆発が遺伝という運命に囚われたサイクル状の物語構造を産んだように、『パリ』においては回転する発動機が、未来志向の直線的な物語構造を構築していくことになる。

2-2. 発動機と自転車；自然、人力、科学

『パリ』において発動機は、爆薬の平和利用の可能性として、サクレ・クール寺院爆破断念の後に検討され始める。そしてその発動機は、自動車開発のためにこそ要請されていたものであった。すでに自転車製造を軌道に乗せていたある工場は自動車製造に乗り出すが、それに適した発動機を見つけられずにいたのだ。この小説に登場する最も重要な「機械」は、発動機と自転車の二つである。共に回転運動の直線運動への変換という特色を持つこの二つのマシンが組み合わさることによって、ピエールとパリは救済されることになる。

兄ギヨームの婚約者であるマリーは、歳の近いギヨームの三人の息子たち、トマ、フランソワ、アントワヌとよく自転車を乗りに出かけていた。ピエールも彼らに自転車の乗り方を教えてもらい、郊外に出かけるようになる。この自転車はトマが働くグランディディエの工場の主力商品であり、一家は3

台の自転車を所持していた。

ある日、いつものように郊外へ自転車乗りに行こうとした時、一緒に行く予定だったアントワヌが来られなくなり、ピエールは初めてマリーと二人だけで遠出をすることになる。スカートではなくキュロットを穿き、颯爽と走るマリーを後ろから追いかけるなかで、ピエールは自分が完全に生まれ変わったことを実感する。マリーもまた「労働と野外」がピエールを良い方向に変化させたと考える。窮屈なスカートや僧服を脱ぎ捨てることを求める自転車は、この小説の中で女性解放とピエールの脱カトリックの道具としての意味付けをなされている（*Paris*, 446-450）。運動によって上気した若い二人が肩を並べて帰宅する姿を見て、ギヨームは自分よりも弟の方がマリーの配偶者にふさわしいと感じ、半ば強引にマリーをピエールへと譲渡する。

ギヨームの爆弾テロを阻止した後、ピエールはトマに連れられて彼が働く工場の見学に向かう。工場長のグランディディエは、新型のモーターさえ開発されれば自動車製造に取り掛かれると語り、ピエールの中に発動機の必要性という考えを植え付ける（*Paris*, 573）。

このようにして「人々を絶滅させるはずだった火薬は、ただ彼らの充足を増大させる（*Paris*, 632）」発動機の燃料に生まれ変わった。そしてギヨームの友人である科学者ベルトロワから革命は「馬鹿げた爆弾」によってなされるのではなく、「科学こそが唯一の革命的なもの」なのだという結論が下されるのだ（*Paris*, 633）。

2-3. 醸造桶としてのパリ

発動機は奇妙なことに、太陽と比較されるようになる。ピエールとギヨームの家族全員が、発動機の完成の瞬間に立ち会い祝福する。立会人となったベルトロワは、ギヨームの開発したこの発動機を「生きていて、太陽のように強い、巨大なパリの上で輝くこの大きな太陽のようだ（*Paris*, 634）」と評する。太陽と発動機という、自然と人工の二つの原動力が世界を動かす。

ベルトロワによる比喩によって、ピエールは彼自身が以前から温めていた

巨大な醸造桶としてのパリ観に思いを巡らす。聖職者として、パリの貧民街にはびこる悪徳やブルジョワ階級の偽善を目の当たりにしてきたピエールは、それらの腐敗の中にこそ新時代への可能性を見出すようになっていた。

パリとは、最良から最悪まで、あらゆる人間が煮立っている巨大な醸造桶であり、愛の妙薬や若返り薬がそこから生じるような、貴重な粉末が糞尿と混ぜ合わされた魔女のおぞましい混ぜ物だ。(Paris, 620)

その醸造桶の中で、ピエールは政治、経済、没落する貴族階級、成り上がったブルジョワ、働けど貧しい労働者といったあらゆる社会階層の人々に出会っていた。それぞれの階層には特有の問題があり、一見するところの社会には希望が見出せないようにも思われる。しかしピエールは、「一番苦い酵母「ferment」の無数の混合から、未来の澄んだワインが大量に生まれるだろう(Paris, 621)」と、「パリの巨大な醸造桶」から生まれる未来に可能性を感じ始めていた。¹²⁾

この醸造桶の例えは楽天的な結末を用意するためにここで思いつかれたものではなく、ゾラの作品において非常に早くから現れていたものだ。『獲物の分け前』(1871)の主人公アリストイッド・サッカールは、ピエールと同じくパリの街並みをモンマルトルの丘から眺める。彼の目には、パリは「サファイアの屋根、ルビーの風見鶏¹³⁾」を持った魔法にかかった都市に見えてくる。都市の中に、眠る財宝を手に入れるためには、それを取り出す術、錬金術を知っている必要がある。都市改造計画の詳細を職業柄、事前に知りながらも、元手がないために投機に打って出ることができないアリストイッドは、一人目の妻に彼の野望を打ち明ける。

「美しい界限には、やるべき事がたくさんある…ああ！今度こそ、全てが燃えるのだ！見えるかい？…まるで化学者の蒸留機«alambic」の中で街が煮立っているようじゃないか¹⁴⁾」。

夕焼けに燃えるパリを前にし、一介の公務員であるアリストイッドは皇帝ネロのように再開発のための都市破壊の夢をみる。後の『居酒屋』においてパリをアルコールで溺れさせる「蒸留器」«alambic»も、この火事と錬金術、化学の連想の中で紡ぎ出されたものである。

蒸留器は次に「醸造桶」«cuve»へと連想の横滑りを起こす。「ある界限が溶けると、醸造桶«cuve»を温め掻き混ぜる奴らの指に黄金が残るだろう¹⁵⁾」と彼は言う。では具体的に、醸造桶をかき混ぜる仕事とは何を指すのだろうか。兄ウージェーヌの口利きで薄給の道路工事に関する公務員の職を得たアリストイッドは、直ぐに兄の真意を理解する。職権を生かし、彼はあらゆる扉を開け、あらゆる書類に目を通した。彼は自分の席にじっとせず、2年間、あらゆる廊下と部屋を歩き続けた。

ピストンの前半の行程、ストックと差異がある初期状態が混ぜ合わされるという点においては、『ルーゴン＝マッカール叢書』と『パリ』の間には、大きな違いはない。環境に居心地の悪さを感じるピエールは、ラヴーヴ老人を救うためにパリ中を走破することで、社会の歪みを読者の目に明るみにし、来るべき「爆発」を準備する。ピエールはアリストイッド同様に、醸造桶をかき混ぜる役割を果たしている。

しかしながら『パリ』においては、その清濁入り混じる混合からは急激な爆発ではなく、緩やかな発酵が生じたのだった。もちろん、この発酵のテーマ自体はそれまでのゾラの小説においても既に浮上していた問題であるが、それ以上に大きな発動機のサイクルの影に隠れていた¹⁶⁾『パリ』では前者のシステムが機能を停止したことで、結果的に後者が前景化しているとも言えるだろう。

3. 社会階層攪拌のためのモンマルトルの丘の地理的特殊性

3-1. 社会階層の狭間にあるモンマルトルの丘

『パリ』で作家は、それまでの『ルーゴン＝マッカール叢書』の中で個別

に扱ってきたあらゆる社会階層、貴族、ブルジョワ、政治家、芸術家、科学者、無政府主義者、労働者たちを全て内包した巨大都市そのものを描くことを試みた。単なる受動的な観察者、政治論争の聞き手としても、主人公ピエールは必要とされる。そのため、彼が出くわす偶然の出会いの数々はあまりに恣意的なものに読者の目には映る¹⁷⁾。しかし彼を醸造桶の攪拌のために必要とされた役割として読み直すと、それらの出会いの必然性が見えてくる。

社会階層攪拌の物語として『パリ』を読み直した時に、特権的な位置を占めるのが、そこから物語が始まり、そこで幕が降りる、モンマルトルの丘である。この丘は三重の意味でパリの中で蝶番の位置を占めている。

第一に、『パリ』冒頭でピエールがこの丘から、東の「悲惨と労働の界限」と西の「富と享楽の界限」とを見比べるように、モンマルトルの丘はこの小説が描くパリにおいて東西の中間点にある。この小説で第一の爆弾テロが起る場所は、丘からほぼ真南に進んだマドレーヌ寺院近くに位置する銀行家の館であった。瀕死の老人を助けるためにパリ中の有力者に面会し続けるピエールは、この館から西へと歩を進め、最後に戻ってきたマドレーヌ寺院内でその老人の死を知らされる。有力者巡りの最初と最後に位置するマドレーヌ界限は、「富と快楽」の界限の最も東に位置しており、それゆえに富の象徴として東部の労働者の目に映るのだ。

第二に、モンマルトルの丘はパリを同心円上に分割した時にも、ちょうど中間に位置している。パリは古い市壁を取り壊し、より広大な地域を新しい壁で取り囲むことで拡大してきた都市である。1841年から1844年にかけて作られたティエールの城壁は、それまでの市境であった徴税人の壁の撤廃に伴い、1860年に正式にパリの境界となった。かつての徴税人の壁の内側、徴税人の壁とティエールの城壁の間の地帯、そしてティエールの城壁の外側という三つの同心円上の分割を『パリ』に当てはめてみると興味深い違いが見えてくる。重要な出来事の大半が起こるのは当然パリ中心部である。負傷したギヨームは城壁外のヌイーで静養を兼ねた潜伏生活を送り、そこには当局の目を逃れる無政府主義者達が集まるようになる。騒乱のパリ中心部と、

潜伏と休息の地区としての城壁外という厳然たる区分の中で、「城壁内の郊外」に位置するモンマルトルの丘は、双方の特徴を兼ね備えた地区として描かれる。工場や工房、画家のアトリエなどが散在しながらも、未開発の地区が多く残るこの丘は、パリ内部にありながら「田舎」*«province»*として機能している。¹⁸⁾

第三に、モンマルトルの丘自体が、繁栄と悲惨を区分けする障壁として機能している。南斜面に位置するサクレ・クール寺院前の広場、ギヨームの工房からはパリを一望することができる。一方で、北斜面のマルカデ通りには瀕死のラヴーヴ老人とテロリストのサルヴァが住んでいた悲惨極まる集合住宅があり (*Paris*, 48)、そこから「百歩ほど」の場所に自転車を製造しているグランディディエの工場がある (*Paris*, 215)。「悲惨と労働」の界限と「富と快樂」の界限との衝突を表現する上で、この地の選択は理に適っているとと言えるだろう。¹⁹⁾

3-2. モンマルトルの丘を軸に攪拌される断絶した界限

このような特殊性を付与されたモンマルトルの丘を観察の起点とすることで、ピエールは当初抱いていた貧富に関する素朴な東西対立を修正する。物語中盤に入り、再び冒頭と同じサクレ・クール寺院前からパリを眺望した彼は「これまでにないほどはっきりとこの人間の大海の分割を見分け」ることに成功する。彼は東西の二分割に代わり、「北部、東部」「南部」「中心部」「西部」の四分割を認める。「すぐその東部から北部にかけて広がる肉体労働の町」、「川向こうの南部」に広がる「知的労働と勉学の町」、「交渉の熱意」がそこかしこから立ち上る中心部、そして血に染まった夕焼けの中で燃えている西部の「幸福な者と、強者の町」の区分である (*Paris*, 243-244)。

素朴な貧者と富者の二項対立から抜け出し、より複雑に入り組んだ都市の社会階層ごとの住み分けを認識したことで、階層攪拌はより効果的に行われるようになる。「悲惨と労働」の分かち難い結びつきを解消することは、「北部と東部」の界限に留まっている限り不可能である。百貨店に自転車を卸し

成功を収めているように思えるグランディディエの工場ですら悲惨から免れていない。そこで働いていた従業員サルヴァはテロを起こし、工場長の精神病を患う妻は中庭の建物に閉じ込められている (*Paris*, 202, 218)。希望は自動車製造のために必要な新型の発動機へと向けられる。そのためには、南部で学んだ若者や、そこで教える科学者の助力が必要となる。²⁰⁾

3-3. パリ最高地点をめぐる宗教と科学の争い

モンマルトルの丘は水平方向に見たときには階級の狭間に位置する一方で、垂直方向の次元で考えた時には、もう一つの特殊性をあらわにする。ジャック・ノワレは、社会の腐敗を告発するレアリスム小説からユートピア小説への「上昇」の動きが『パリ』の都市描写に刻み込まれていると指摘する。彼によると、この小説には「本物の都市の客観的な空間」と「夢見られた都市のユートピア的な空間」が混在し、前者では「悲惨、利己的なぜいたく、国会の腐敗そして社会暴力」が、後者では「労働、愛、規則正しく再規定された生」が描かれる。後者の空間が生まれるのはモンマルトルの丘の上のギヨームのアトリエであり、この地はパリの内部にありながら、天上的な性質を持つ空間となる。²¹⁾

この「天上的」な空間は、ローマ・カトリックと科学が競って奪い合う場として『パリ』では描かれている。ギヨームの爆弾テロとピエールの棄教の誘因には、20世紀を目前とした時代に、パリ最高の丘の上から都市を支配するかのよう、ローマの権力を代表する巨大な寺院が建造中であることへの危機感が共通項として存在する。サクレ・クール寺院爆破計画こそ直前で阻止されたものの、パリを見下ろす宗教は別の方法によって排除されることになる。それが本書の中で繰り返し「新しい宗教」と呼ばれるようになる「科学」である (*Paris*, 625-626)。

しかしゾラはなぜこのような、楽天的に過ぎる科学礼賛の結末を『パリ』に用意しなければならなかったのだろうか。この問いに答えるためには、本書を19世紀末のペシニスム隆盛の文脈の中で考える必要があるだろう。

1880年の母とフロベールの立て続けの死によって、当時フランスを席卷していたショーペンハウアーの厭世主義に引き寄せられたゾラは、『ボヌール・デ・ダム百貨店』（1883）や『生きる歓び』（1884）においてペシミズムを乗り越える人々を描き、その克服を試みる。

1884年3月にユイスマンスは、『生きる歓び』への感想を伝えたゾラへの手紙の中で、「ある人がペシミストでないのであれば、彼はキリスト教徒か無政府主義者になる他ない²²⁾」という彼自身の考えを伝えていた。『パリ』の主人公ピエールはキリスト教、その兄のギヨームは無政府主義という、ペシミズムへの二つの対抗策を代表しており、彼らは二人ともその陥穽から抜け出すことに成功する。今や袂を分かってしまった年下の友人からの、10年越しの問いに対して、ゾラは「科学と労働」という第三の道を示したことになる。²³⁾

おわりに

本稿は、ゾラが『ルーゴン＝マッカール叢書』で用いてきたサイクル状の物語構造を捨て、未来へと開かれた新たな物語構造を、どのように『パリ』において構築してきたのかという問題を考えてきた。繰り返される爆発と隠された発動機サイクルからなっていた回帰的で閉じた物語構造は、爆発の挫折と発動機の具現化によって漸進的で直線的なものへと変わった。発動機サイクルの放棄とともに、浮上してきたのが醸造桶としてのパリという生命のサイクルである。個々の社会階層の悪徳、腐敗が混ぜ合わされることによって、発酵作用が起こり、そこから次の世代の希望が生まれてくる。主人公ピエールは、水平、垂直、両次元において特異な地点にあるモンマルトルの丘を起点として、パリのあらゆる社会階層を攪拌する役割を果たしていたのだ。

[注]

- 1) Henri Mitterand, «Topographies, topologies», *Zola : L'histoire et la fiction*, PUF, 1990, p.211-212.
- 2) Auguste Dezalay, *L'Opéra des Rougon-Macquart : Essai de rythmologie romanesque*, Klincksieck, 1983, p.126.
- 3) *Ibid.*, p.98.
- 4) Michel Serres, *Feux et signaux de brume : Zola*, Grasset, 1975, p.98.
- 5) Émile Zola, *Germinal*, dans *Les Rougon-Macquart*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1960-1967, tome III, p.1588-1591.
- 6) Émile Zola, *Paris*, édition de Jacques Noiray, Gallimard, 2002, p.37.『パリ』からの引用は以降、(*Paris*, 37)のように本文中でページ数を示す。なおすべて拙訳を用いたが、以下の邦訳を参考とした(エミール・ゾラ『パリ』、竹中のぞみ訳、白水社、2010、上下巻)。
- 7) 中村翠、「ゾラの後期作品における「予告」：転換期としての『三都市』」、『フランス語フランス文学研究』、2013年、103号、p.167-184.
- 8) セジウィックは、ホモソーシャルにおいて女性の譲渡が男性間の連帯を強化する手段として機能することを、レヴィ＝ストロースらの人類学的研究を参照しながら示している。Eve Kosofsky Sedwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York, Columbia University Press, 1985, p.26.
- 9) ジャック・ノワレによると、19世紀前半の作家の多くは科学技術に対して、「恐れ」の中に無意識の「感嘆」を抱いていた。当初は彼らと似たためらいを機械に対して持っていたゾラは、1860年から1885年にかけて徐々に、小説宇宙の中心に「機械」を位置づけるようになったとノワレは考える(Jacques Noiray, *Le romancier et la machine : L'Univers de Zola*, José Corti, 1981, p.20-26, 124)。これを踏まえると、ゾラにおける科学技術表象は、1860年代の「自然を破壊する工業」、1880年代の「怪物的な機械」、そして1900年前後の「ユートピアにおける科学と労働」と、大まかに三段階に分けることが出来るだろう。
- 10) とはいえゾラは創作の秘密を明らかにしてしまう傾向を持った作家である。『ルーゴン家の誕生』(1871)を献本されたフロベールは、この小説の力強さを激賞しながらも次のように苦言を呈する——「あなたは序文であなたの秘密を語っています。それはあまりに純朴です。またあなたは、自分の意見を説明していますが、私の個人的な詩学においては、小説家はその権利を持っていません」(Flaubert, *Correspondance*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1998, tome IV, p.424)。

またバジリオは、『居酒屋』において、不吉な力を換喩的に暗示していた、ジェルヴェーズの背後で唸る「機械（共同洗濯場の湯沸かし器、居酒屋の蒸留機）」が、『ボヌール・デ・ダム百貨店』では類別され、明示的に「ギア」や「歯車」と名付けられることでその恐ろしさが失われていると考える。Kelly Benoudis Basilio, *Le Mécanisme et le Vivant : La métonymie chez Zola*, préface d'Henri Mitterand, Droz, 1993, p.146.

- 11) Auguste Dezalay, *L'Opéra des Rougon-Macquart : Essai de rythmologie romanesque*, p.195.
- 12) 『パリ』に対する賛否はドレフェス事件に対する立場とほぼ重なっていたが、味方であるはずの社会主義者陣営もこの「醸造桶」の例えに関しては評価が分かれていた。ウージェヌ・フルニエールは、社会変革に取り組むことを諦めた活動家が、資本主義社会に取り込まれてしまったものだと次のように批判する——「ピエールは、妻と子供の間で、この諦めの理論に適したブルジョワ的目的を達成する。発動機は生まれたばかりの小さなジャンに金利収入を与えることだろう」（Eugène Fournière, *La Revue Socialiste*, mars 1898 ; cité dans Émile Zola, *Paris*, notes et commentaires de Maurice Le Blond, Eugène Fasquelle, 1929, p.572）。
- 13) Émile Zola, *La Curée*, dans *Les Rougon-Macquart*, tome I, p.388.
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*
- 16) 「腐敗、発酵」が1860年代から1880年代のゾラの作品で中心的主題として成長していく過程については以下の拙論を参照のこと。安達孝信、「ゾラ『クロードの告白』における郊外と「自然」——ゴンクール兄弟『ジェルミニエール・ラセルトール』と比較して——」、『フランス語フランス文学研究』、2018年、113号、p.299-317.
- 17) Henri Mitterand, *Zola tel qu'en lui-même*, PUF, 2009, p.96.
- 18) Henri Mitterand, *Zola*, tome III, *L'honneur (1893-1902)*, Fayard, 2002, p.272.
- 19) 彦江智弘は社会学的見地から『パリ』で描かれる都市風景、また特にモンマルトルの丘周辺の労働者の住環境を分析している。「ゾラにおける「社会的なもの」の上昇——『パリ』のトポグラフィ——」（『常磐台人間文化論叢』、2016年、2巻1号、p.14-33）および「ゾラにおける「社会的なもの」と住居——『パリ』におけるモンマルトルの家」（『日仏社会学会年報』、2016年、27号、p.23-42）。
- 20) これらの地理的な階層攪拌に加えて、結婚もまた階層間障壁の撤廃に重要な役割を果たす。ゾラの『四福音書叢書』では、階級間格差のないユートピア建設のために結婚が重要な役割を果たしている。Evelyne Cosset, *Les Quatre*

Évangiles d'Émile Zola : Espace, Temps, Personnages, Genève, Droz, 1990, p.41.

- 21) Jacques Noiray, introduction de *Paris*, dans *Œuvres Complètes*, Nouveau Monde, 2008, tome XVII, p.21.
- 22) J.-K. Huysmans, *Lettres inédites à Émile Zola*, publiées et annotées par Pierre Lambert, Genève, Droz, 1953, p.99.
- 23) ゾラ『労働』(1901)において科学者ジョルダンが示す「人生とは労働そのものである、人生とは化学的なまた機械的な力による、たゆまぬ労働である (Émile Zola, *Travail*, *Œuvres complètes*, dirigés par Henri Mitterand, Cercle de livre précieux, 1968, tome VIII, p.668)」との見解を、作家の唯物論的理論を代弁している箇所としてアルノー・フランソワは注目する (Arnaud François, *La Philosophie d'Émile Zola : «Faire de la Vie»*, Hermann, 2017, p.275)。発動機と醸造桶という、物語を駆動させてきた二大動力源を、生を動かすこれらの機械的、化学的力の具体例として捉えることも出来るだろう。

(大学院博士後期課程学生)

Résumé

L'évolution de la structure narrative dans *Paris* de Zola
: Du cycle à la ligne droite

Takanobu ADACHI

Le roman de Zola, *Paris* (1898) est à la fois le dernier volet du triptyque des *Trois villes*, et l'introduction de sa série, à venir, des *Quatre Évangiles*. Plutôt que sur les causes de la conversion politique dont ce livre constitue le pivot pour son auteur, passé du socialisme militant au détachement de l'utopie, la présente étude se concentre sur l'évolution des structures narratives, à partir du cycle des *Rougon-Macquart* : de ce point de vue aussi, *Paris* est à la charnière de deux époques.

Les Rougon-Macquart se caractérisaient par la prédominance des structures circulaires, que Michel Serres a comparées au cycle du moteur à quatre temps. L'équilibre posé par l'*incipit* des romans, puis bouleversé par l'irruption d'un actant extérieur, se reformait à l'*excipit* par l'expulsion de l'intrus. Or ce schéma n'est pas applicable à la construction de *Paris*, dont le héros, Pierre, un prêtre d'humeur sombre, mal à l'aise dans son milieu, n'est pas expulsé à l'*excipit*, mais connaît au contraire une mue qui fait de lui le père d'un enfant promis à la domination de la société future.

Le cycle des *Rougon-Macquart* était mis en branle par une série répétée d'explosions, littérales ou symboliques. Dans *Paris*, la bombe destinée à un attentat terroriste est abandonnée et *recyclée* en combustible pour le moteur à explosion des automobiles. La structure narrative circulaire trouve ainsi son incarnation dans l'univers romanesque, cependant que *Paris* acquiert le statut de roman à thèse.

On assiste à l'émergence d'une nouvelle structure : le cycle du soleil et de la vie. *Paris* est comparée à la cuve dans laquelle Pierre remue la pourriture de la société afin d'engendrer l'espoir de l'avenir. Le brassage des milieux sociaux se produit dans le secteur de la butte Montmartre, lieu de passage entre l'intérieur et l'extérieur de Paris, entre les quartiers bourgeois et ouvriers, théâtre stratégique où se livre la bataille entre la religion et la science, laquelle se trouve qualifiée de «nouvelle religion».